

太陽の下、ク  
マとウサギ

sari-sari

六月の間わき役に回っていた太陽は、七月の梅雨明けとともに、ふたたび主役の地位についてはりきっている。誰のアンコールに呼ばれてなのか、午後五時を過ぎても太陽は存在感をはなれて、舞台から消えない。乾いた空の真ん中でぎらぎらしていた。

「や、やっぱりさ、俺はきょ、今日の学校のことは、ひ、ひどいと思うんだよ」

親方が言った。妙にきっぱりとして、なんだかすごく緊張した選手宣誓の人ってかんじの口調だった。言った後で親方は難しい顔をして、額からふき出す汗をぐしぐしと腕でぬぐい、んふーと荒い鼻息をもらした。

僕は困った顔をして、隣を歩く親方を見つめる。えっと、なんでこのタイミングで学校のこと？ 学校が終わって今は、塾に向かう途中だろ？ それよりなにより、僕たちはずっと新しいゲームのラスボスの倒し方を話していなかったっけ。火の玉に注意して、ジャンプのタイミングが大事なんじゃないっけ。コインは多くとっておく、そうだよな現実と一緒にだよなカネ欲しい、って話は親方、どこにいった？

頭にわき起こるクエスチョンマークの洪水をとりあえずせき止めて、僕は後に続く言葉を待った。親方はいつも大事なことを発表するとき、つかえながら話しだす。けれどいくら待っても、僕の横にいる彼は唇をぐっとかんだまま、ただだまって前を見据えていた。小学校六年とはいえ大柄な親方が真剣な顔で黙り込むとすごみがあって、百戦錬磨の熊のように見える。

でも、左手にぶら下げたカスタードクリームが練りこんであるスティックパンの袋と、右手に持つ紙パックのフルーツ・オ・レが、親方の実年齢十二歳を教えていた。（ちなみにどちらも親方の好物で、俺は最後の晚餐だってもちろんこれでいく！ と言っていた）

ギャップのある男はモテるというけれど、こういうことではないんだろうなあ……。

夕方になっても、まだ朝からの寝グセが残る親方の頭を見つめて僕は思った。深刻な表情で、親方はたぶん今たいしたことは考えてないんだろうなあ……。そう考えるとなんだかうれしくなって、僕の顔は自然とにやけた。

けれど、すれ違う人たちが、珍獣を発見した時のような目で僕らを一瞬ちらっと見ていることに気づき、僕はあわてて笑顔をひっこめた。そりゃあ、そうだよな、僕は思った。おそらく学年で一番体の大きい親方と、一番小柄でやせっぽっちの僕と一緒に歩いているのって、アンバランスで目につくんだろうな。しかも、片っぽはしかめっ面で、もう片っぽはなんだかにやけ顔。僕だってそんな二人組が前から歩いてきたら、注目してしまう。僕がチビなばかりに、親方、ごめんよ。心の中で僕はつぶやいた。

親方と僕は幼なじみで、通っている塾も同じ、小学校の六年間クラスもずっと一緒。親方っていうのはもちろんあだ名で、石橋(いしばし)瑞樹(みずき)という美少女みたいな本名がちゃんとある。でも、名前と呼ぶ人はほとんどいない。保護者の人たちからも親方くんと呼ばれ、意外にマダムに人気がある。あと、小学校六年で親方って呼ばれているやつの宿命として、もちろん体がでかい。

僕らは、お通夜みたいな空気をまとわせて（これもこれで周りの人たちは、ゲッて感じで顔を

しかめていたけど) 無言で数メートル歩いた。

「だってさあ、シンペイはくやしくないの？」

親方が再び口を開いた。

「内山先生は人を見て怒ってるでしょ。シンペイとか俺みたいのには、きつく言えるんだよ。反撃してこないって分かってるから。丹沢たちだってそうだろう。からかうのは、いつも俺らのことばかりでさ。人をバカにして」

ここまで一気に話したあと、親方は最後にそとつけ加えた。

「地味ってだけで、俺たちは、しいたげられて当然の存在と思われてるんだよ」

あ、言っちゃった、と僕は思う。僕たちがこれまで見ないようにしてきたことに、ライトをあてちゃった。

突然向けられた光は小さな声でも鋭くて、僕の目の奥底をじんじんさせた。どうすればいいんだろう。僕は痛みを感じながら、もう一度それを暗闇に閉じ込めて、見なかったことにする方法を考えていた。

ふっ、親方、オレは過ぎたことには興味がないのさ。過去の話はやめにしようぜ、とふざけてみようか。

いやいや、親方が本気で怒りだしたら困るなあ、だめだ。

せっかく忘れていたことを思い出させるなよ、このお、なんてオーバーリアクションで親方に体当たりして、二人でじゃれあう。悪くない。悪くないけど、冴えないでっかいのとちっちゃいのが道の真ん中でどたばたしていたら、すれ違う人たちはどんな感想を持つだろう。これもまづいな。そうすると……。

仕方ないだろ。勝負をした覚えもないのに一部の人は自分たちこそ勝者で、僕たちのことを負けて、ああはなりたくない人種だと思って暮らしてるんだから。待てよ、人種って思われてるかな。ヒトって認識されていたらまだいい方だ。おそらく、サンドバッグくらいにしか考えてないだろう。それに実際、僕たちは地味なうえに、情けないじゃないか。

だってさ、どうして親方は、学校の外で僕といるときだけ、自分のことを俺って呼んでるの？

学校でも家族の前でも、俺って言えばいいのに。なんで僕といるときだけ、たどたどしく乱暴な言葉を使うの？ 他の人といるときにも同じことを言ってみろよ。丹沢たち、なんて本人に面と向かったときに呼びすてる勇気はないくせに。どうして僕の前でだけ少しワルぶってるの？

なんで？ どうして？

どうして僕はさ、自分と同じか下の立場の人間だけにしか強気になれないの？ どうして僕は、上だ下だ、劣ってるなんて無意識に考えちゃうの？ いつから僕は、幼なじみのことが大好きで、大嫌いになった？ ねえ、なんで？ どうして？ 教えてくれよ。

って本音をぶちまけて、あとはもうなるようになればいい。本当はこれを一番に試してみたいけれど、たぶんこの世に存在するすべての選択肢の中で最も選んじゃいけないこともこれなんだろう。そしたらもう、僕は動けない。どうするんだ、僕。どうしよう、親方。

僕がちらっと横を見ると、親方もこちらを見ていて目があった。たったいま詐欺にあいました、っていうくらい親方は悲さんな顔をして、その目が訴えていた。

どうしよう、シンペイ、ぼく思った以上に大きなこと言っちゃったよ。

ええっ、と僕は眉をひそめつぶやいた。親方はしょんぼりと足元に視線を落とし、せわしなくまばたきをする。ぱちぱちぱちぱち、助けを求めてどこかに秘密の信号でも送っているのかもしれない。

ったく、自分の言葉に自分でビビるなよお。ほら、こういうところが情けないんだって。さっきまで荒れていた心が、こんなに簡単なことでもうすでにわくわくしちゃってるじゃんか。ほら

、僕もこういうところが単純で情けないんだよお。

ほんのわずかに湿り気を残した夏の初めの風が、半そでのTシャツの中を通過していった。風は僕の背骨をなでて、今年も夏が来たぞって、体中の細胞に宣戦布告する。そのあとで、鼻先をくすぐり、アスファルトとほこりのまじった都会の夏の匂いを出現させた。この匂いはいつも僕を動物にもどして、体の奥深くから未知の巨大エネルギーをわきあがらせる。

僕はしょげている親方の横顔を見つめ、にやにやした。親方もそれに気づき、最初は知らんぷりをしていただけで、すぐにふっと吹き出し、僕らは一緒になってにやにやした。無言のにやにやは、しばらくすると声をあげての大爆笑に変わり、あーあって笑いながら空を見上げたら、太陽と目があった。